

現行国定教科書批判

第一 よく学びよく遊べ

「今は学ぶ時なれば」
壇上に立つ教師、下に並ぶ生徒、行儀が第一、かくして威嚇的な空気が醸されるのである。

「解しがたいことがあれば、話の終りたる後に、手を挙げて問うべく、みだりに発言してはならない。だが発言の場合にあつては、恥じ臆することなく明瞭に……」

といつてある。だが威嚇的な空気は純粹な発言——疑問のための発言を、芽生えのままで萎縮させてしまう。それは「みだりに発言」ができないからである。

これに引きかえて不純な発言——発言のための発言、自己誇示の手段としての発言を助長する。すなわち人に支配されずには生きることのできない、人がはめてくれないければ仕事をすることのできない悪習慣が養われる。
遊ぶときもそうである、

「今は遊ぶべき時なれば」

「運動場に出て何事もなすことなく、いたずらにたたずみおるは宜しくない」

と言ひ、そんな子は一種の不良児として監視される。それに反して、命令のままに、機械的に、いわゆる「よく遊ぶ」子は優良児なのだ。

だが、学校での優良児は、社会的には低能児だ、ともいわれている。それらの原因は、被支配を奨励する精神に根ざしているといつてよい。

自発的精神の否定、成長本能に対する無理解が学校教育の出発点であるとすれば、そうした教育の無効果は、（正しい意味において）けだし当然であるといわねばならない。

一、皆さんが学校にくるのは何のためですか。

二、先生のお話中はどうしていなければなりませんか。

三、わからないことのあつた時にはどうしなければなりませんか。

四、先生にものを言うときには、どんなふうに言わねばなりませんか。

五、運動場ではどんなにして遊ばなければなりませんか。

六、運動場に出て、どうしてはよくないでしょう。

などといつてある。

が、人間というものは、元来よく学びよく遊ぶように出来ているのだ。だのに教室にあつては威嚇的な空気が、純真な発言を妨害して、「よく学ぶ」ことを出来なくし、運動場にあつては、「運動」が「労働」化されて、「よく遊ぶ」こと不可能。この課の目的奈辺

にありやと問いたい。

ここにおいて、よく学び、よく遊べの「よく」が曲者だと思う。「よく」とは何か。いわく学ぶことはよいことだが、行儀よく学ばなければならぬ。遊ぶことはよいことだが、秩序正しく遊ばなければならぬ。

つまりこの課の目的は、学ぶということ、遊ぶということにあるのではない。行儀とか秩序とかにある。即ち学ぶということ、遊ぶということ、この人間の二大欲求に活力を与えようというのが目的ではない。この二大欲求を制しようというにある。そこに「よく」の道徳的意義がある。

こうした消極的な道徳教育が、畢竟、真剣に学ぶことも、真剣に遊ぶことも出来ない無力な人間をつくることになるのはいうまでもない。いったい今日の道徳教育は人間を生かすためではなく、その反対のためにのみ用いられている。人間を生かすための教育は、人間性を最も自然的に活躍せしめる意味での教育なのだ。

よく学ぶのに行儀等は問題ではない。彼等子供の知識欲を刺激し、集注せしめる対象の有無が問題なのである。すれば行儀等はひとりでよくなるだろう。それと同じく、よく遊ぶについては、よく遊びうる事情の有無が問題なのであって、そうした事情のもとでは「いたずらにたずむ」者はなからう。

無理解と干渉との上に築かれているこの課の教育的な意義および効果は、まさに零であると断言したい。

三十七四

第二 時刻を守れ

「時刻をまもれ」ということを徹底せしめるためのものとしては、この教材は不適当である。子供たちがこの掛図を見、挿絵を見て、第一に惹きつけられるものは何だろう。「ここにて遊び居らば課業の時刻に遅るべし」といつて注意を促している正太郎の姿であるよりは、むしろ図中の他の子供達を惹きつけている二匹の可愛らしい白い仔犬の姿なのだろう。子供ほど動物を可愛がり、動物に心を惹かれるものはない。ばかりでなく、仔犬の戯むれている姿を見れば、彼等は知識欲を、美感を、愛情を満足させ、成長させる。それゆえに限らない興味と好奇心が起る。およそ興味と好奇心のあるところには、他のいかなる場合にもまさる教育と成長が、心理的に行なわれているのである。

だが、子供たちは、こうしてはならない。課業の時刻に遅れる。なぜ課業の時刻に遅れてはならないのか。もちろん「課業の時刻に遅れざるようにするは学校生徒たるもの大切な心得なり」なんてことは彼等とは無関係だ。正太郎をしていくらこんなことを言わせてみたところで無駄だ。

「課業の時刻に遅れると先生から叱られる」

先生から叱られるということのみが彼等を学校に駆り立てるのであって、つまり彼等はそれ自身の問題としては、遅れるなんてこと、みじんも気にかけてはいないのである。

「学校生徒たるものの大切な心得なり」などという抽象的な理屈は、子供とは全然相容

れない。

子供は純真な人間性の持ち主であるから、あらゆる道徳や行為は、純真に自己中心的に欲求される。このゆえに彼等をして自発的に遅れさせぬためには、仔犬にまさる興味と好奇心の対象が学校にあらねばならぬ。

要するにこの教材は「時刻を守れ」ということを徹底せしめるためのものとして不適当であるのみならず、事実上の問題としては「先生からやかましく（学校生徒たるものの心得なりなど）いわれるから遅れないようにしなければならぬ」という卑怯な習慣を養うことに役立つのである。

むしろ思う。「時刻を守れ」というよりは、「時刻は守らずにはいられない。なぜなら他の人が迷惑するから」という相互愛に根ざした道徳として認め、そして、そうした意味においての適切な教材を選択した方がよいではないか。

「学校より帰るときにも、父母の許しなくして途中に遊び、又は友達の家に入り寄りなどして、帰るべき時刻に遅るべからず」ということなども、規律の精神に基づく道徳であるとするより、「親が心配するから。親がさびしいから」というような、実際の愛情に基づく道徳であると見るほうが、幾ら効果的だか知れない。

すべての旧式の道徳は、空疎な、抽象的な理想論や、仮定的な項目をもととして築き上げられているが、今日では極めて実際の、現実的な、生活内容として認められねばならないのである。

三十一 外

第三 なまけるな

一、亀が兎とかけっこをするとき、どんな心で急ぎましたか。

二、兎は途中でどんなことをしましたか。

三、兎が目を覚ましてかけて行つたとき、亀はどうしていましたか。

四、亀が兎に勝つたのはなぜですか。

何よりもこの教材を、私自身が子供のとき、どんなふうにかとう話をしたい。

私は考えた。「もし兎も怠けず、亀も怠けなかったならどうだろう。どんなに亀が急いでも、兎に勝つことは出来ない。だから亀は結局駄目」

つまるところ、この教材は、優等生本位の教材——優等生に油断をするなといましめるためだけの教材である。したがって一般凡庸の子供を救うことにはならない。ばかりでなく、

怠けるな。勉強しろ。ということが、偉い人になるために、という目標によつて強調せられているこの課の精神は、階級差別の思想に基づく競走の奨励であり、同時に偉い人、成功した人というものが、この世の最高の地点であるから、学問からでも、金儲けからでも、その地点に達しさえすればよいという打算的な、低級な思想を植えつけることによつて、必然的に一般の道徳を悪化せしめる原動力となつていくということが、断言せられるのである。

偉い人、善い人になるための学問という考え方、学問を偉い人や、善い人、功名や手柄の道具として見ている旧式な考え方は、否定せられなければならない。

学問とは真理を探究することである。いまや新時代の子は、功名や手柄のために学問するような学問の邪道から解放されて、学問の直接的な目的によつて立たなければならぬ。宇宙は未発見の真理に満ちている。生涯を功名や手柄等のための生活に導き入れるような教育は廃されて、彼等子供の真の知識欲を啓発し、限らない究学心を活躍せしめるように向ける教育こそ重んじられてこなければならぬ。

「怠けるな、出世がしたいならば」というよりは、「怠けるな、未知の世界が知りたければ」なのである。

第四 友だちは助けあえ

「友だちは互に親切をつくして相助け相救うべきことを教うるを以て本課の目的とす」というのであるが、教うるという態度に基づいて選択された教材であるから、おたけの善い行いということがこの課の眼目になっている。

しかし、友情をほんとうに自覚させ、友だちは互いに親切をつくして助け合ねばならぬということを心から思わせようというのが目的であるならば、おたけの善い行いは抹殺して、おまつを独りさびしい雨天の学校に置き去りにしておいたならどうだろう。

おまつは傘をもたない。ほかの子供は傘をもっている。傘をもっているほかの子供達は、

三十八八

もうずっと前に帰つてしまい、おまつは独り取り残されて淋しい日暮の廊下に立つている。先生達さえも、それを知らないで行つてしまった。小使いさんもない。誰もいない。

こんな教材であつたなら、子供達はかえつて深く感動し、しかも最も純真な意味での友情を自覚するであろう。子供達はおまつを置き去りにした多くの子供たちを憎み、自分なら、おまつを自分の傘に入れて行つてやるのにと思ふであろう。

これに反して、おたけの善い行いには、純真な意味での友情よりは、善い行いとしての行いという或る鼻持ちのならぬものがある。友達に親切をつくすということは善い行いである。自分は今日、善い行いをしたのだ、という誇りがそこに芽生える。

しかし、これからの道徳は、すべてが、ずっと地低く、そして至情のどん底から出たものでなければならぬ。人間の当り前な、必然的な至情。だから善い行いとしていたずらにほめそやされるような性質のものではない。そこには誇りもない。またほめそやされるからと言って、誇りがなければと行って来ないような、あやふやなものではない。

この課ではどうであろう。善い行いを、はめることによつて釣ろうとしている。ほめてやるから善い行いをせよというのである。

人間の本性は、必然的に着実であるから、こんな教育にはめつたに感動しない。したがって、効果がない。

それに引きかえて、着実な至情を刺激する教材には、深く動かされる。

要するに今日の修身教育の無効果である原因が、幾度もくり返すように、人間に対する

理解が欠けている点にあることは、この課のような浅薄な教材を見ても明らかである。彼等は道德をしゃべり過ぎる。彼等は道德の秘鍵を掴むことが出来ない。

第五 喧嘩をするな

「蝶に心を奪われて、思わずも互いにつきあたりたるならん。かかる場合には双方より詫びあうが宜しきなり。日頃机を並べて学び、手を執りて遊べる友達の間柄にて、喧嘩するとは何事ぞ」と教師が出てきて戒めているのには感心ができない。二人の児童は首を垂れて深く恥入りたりとあるが、それは教師という支配者に対して恐れ入っているのだ、お互い同士が自発的な意味で恥入っているようには考えられない。

むしろ、教師は、喧嘩した子供達を軽くあしらった方がよくはないだろうか。鹿爪らしい教訓よりは、その方がお互い同士を早く恥入らせてしまふ。どうせ、ここに出ているような喧嘩なら、晩かれ早かれ仲直りすることはきまつている。取り立てて教訓の材料にするほどのものではないようである。（蝶を取ろうとして争つて喧嘩になつたというのである）

それよりも、もつと違つた、もつと忌むべき性質の喧嘩が、子供達の世界を支配していることに、私どもは注目しなければならぬ。

それは、暴力を勝とする意味での喧嘩である。

暴力に自身のある子供、というものは大底相互愛の薄弱な子供である。およそ私どもに

三十九外

この愛が欠けているなら、私どもはもつと、いわゆる強いに違いない。客観がなく、主観ばかりなのだから、どんながむしやらかな事でも、恥知らずな事でもして退けることができる。ところが、その理屈がはつきりしていなくて、或る子供が他の子供を組み伏せた。あるいは惨めな目にあわせたという事実を、そのまま、彼は彼に負けたのだ、というように一般にみなしているのは野蛮とも何とも例えようがない。

これがこのまま看過されてある間は、到底、子供達から喧嘩というものを取りのぞくことは出来ない。

負けるということは誰も好まない。なぜならそれは多くの場合、正義が負ける、正義が暴力に負ける、ということの意味しているからである。暴力で負けたことが全体的に負けたことであると思なされているからである。したがつて、正義感の強い人間は、組み伏せられることを承知していながらも、矢張り立ち向かわずにはいられない。しかし立ち向かいはそのものの、暴力そのものに対しては彼は本質的に否定的である。ところが一方は暴力だけの人間だからどんな事でもして、そのために自ら胸を傷めたりするような事がない。それで勝つ。そうすると彼は得意になるし、他の一般の子供達も彼が勝つたことを認める。正義は泣き寝入りになり、負けた子供は自分の惨めさに泣く。

しかし負けた子供が果して本質的に負けており、あるいは惨めな境遇にあるものであろうか。否。一般の風潮、暴力の勝を勝と認める一般の風潮を排撃して、正義の勝を勝と見なすべき良風を築き上げさえしたなら、組み伏せられた位が何だろう。かえつてそれは彼

の進歩的な人格の象徴であり、他は嘲笑憫笑すべき痴漢のふるまいであるに過ぎない。

「喧嘩するな」と頭かぶせに言うことによつて、喧嘩の世界にわだかまつているこうした複雑な事情を等閑に付してしまふような事は飽くまでも不可である。喧嘩の根をたやそうとするならば、いたずらに概念的に、そして抽象的に教訓するよりは、「暴力の横行を懲らし虐げる」意味での適切な教材を撰択して、暴力を圧伏し、正義を抬頭せしめるようにしたがい。

およそ喧嘩のあるところには、何等かの正義と、何等かの暴力とがある。「喧嘩をするな」と頭かぶせに言つたところで、暴力が正義に打ち勝っている場合にあっては、決して喧嘩がなくなるわけがない。暴力こそ喧嘩の種である。それを圧伏しさえするなら、喧嘩はたちまち友情に変わるだらう。

どうもたびたびいうだけでは修身科の教材には、実際的な意味で、道德教育に熱心であるとは見受けられないものが多い。

一寸したお座なりでもつて、お茶を濁しているのではなからうか。

後 記

この小冊子は、昭和五年三月に創刊され、翌昭和六年六月まで十六号にわたつて発行された『婦人戦線』誌より、高群逸枝の執筆した諸評論を採録したものである。同誌には、評論の他に小説、詩等の創作が七篇余り掲載されているが、これは割愛した。

次にその初出を列記する。

わが国男性諸君に見参(1) (5)

生田花世さんへ私信がわり

無政府恋愛を描く

美人論―都会否定論の一

階級道德と無政府道德

高群逸枝―わが恋の記

我等の婦人運動

私はこう思う

婦人戦線一年・婦人思想史

五号 九号

六号 (昭五・八)

七号 (昭五・九)

八号 (昭五・十)

九号 (昭五・十一)

十号 (昭五・十二)

十一号 (昭六・一)

十二号 (昭六・二)

十三号 (昭六・三)

隨筆・夜を行く

恋愛と性欲

現行国定教科書批判(1) (2)

(以下は、I集に収録)

婦人戦線に立つ

アナキズム文芸の態度

我国マルクス婦人の頭脳拝見(1) (4)

家庭否定論

無政府主義の目標と戦術

プロ婦人と男性批判

無政府主義と性の処理

無政府主義問答(1) (8)

一号(昭五・三)

〃

〃 四号

二号(昭五・四)

四号(昭五・六)

〃

五号(昭五・七)

〃 十二号

婦人戦線に立つII 高群逸枝・著

女性史研究会 編集

一九七三年十月発行